

HAPPY ENDLESS

ハッピーエンドレス

心の残像月替わり雑画展

Vol.2

絵と文・長尾みのる



NAGAO

望星eブックス

ハッピー・エンドレス

2007

Vol.2 収録カラー作品一覧

No.051 ~ 100 (2007年7月~ 2011年8月)



No.051

2008



No.052



No.053



No.054



No.055



No.056



No.057



No.058



No.059



No.060



No.061



No.062



No.063



No.064



No.065



No.066



No.067



No.068

2009



No.069



No.070



No.071



No.072



No.073



HAPPY ENDLESS

2007



Vol.2 収録モノクロ作品一覧

No.051 ~ 100 (2007年7月~ 2011年8月)

No.051



No.052



No.053



No.054



No.055



No.056

2008



No.057



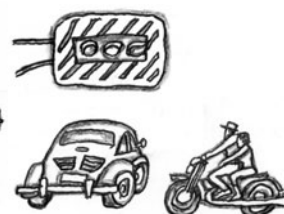
No.058



No.059



No.060



No.061



No.062



No.063



No.064



No.065



No.066



No.067

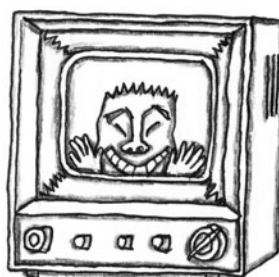


No.068

2009



No.069



No.070



No.071



No.015



No.073



No.074



No.075



No.076



No.077



No.078



No.079

2010

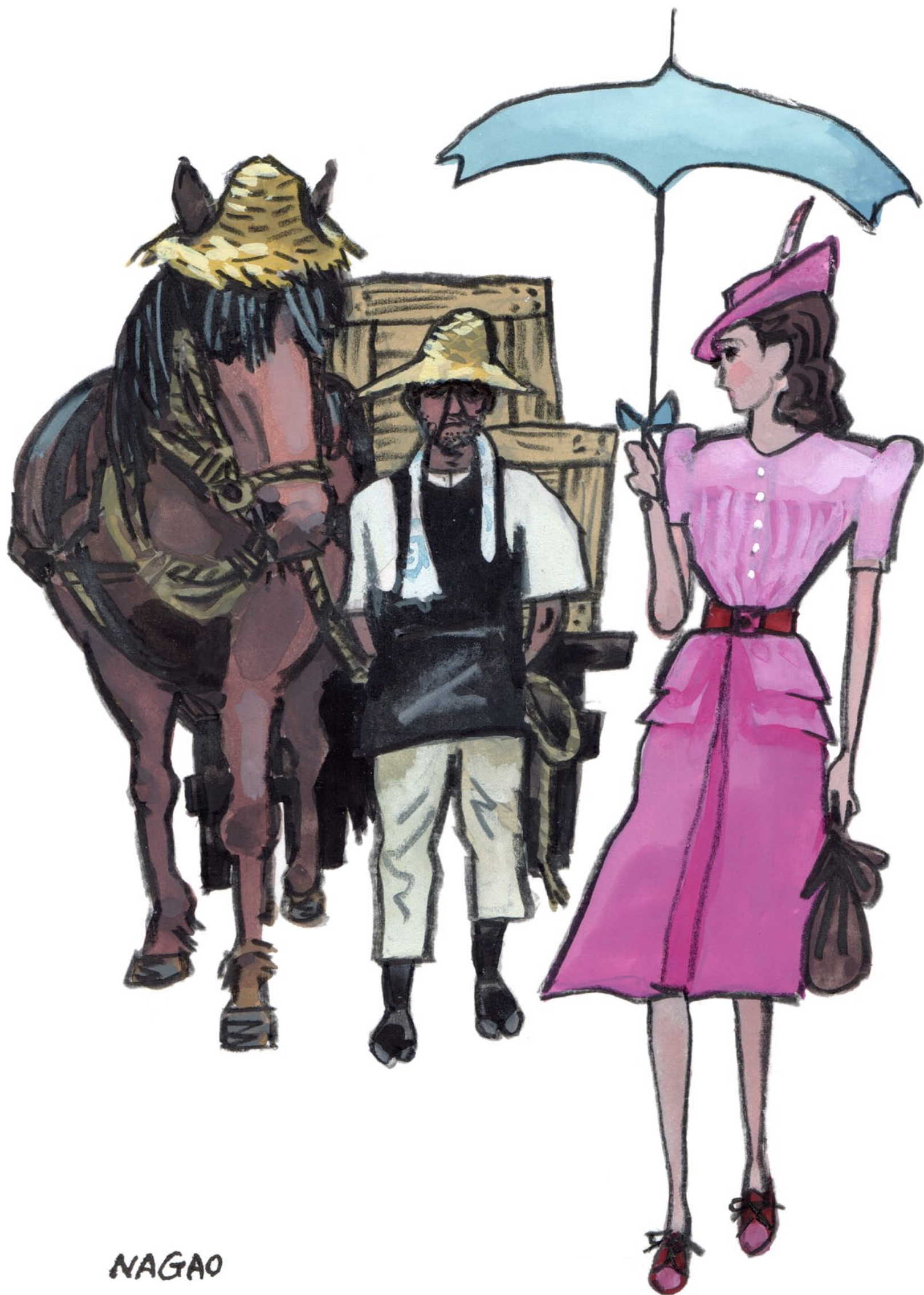


No.080



2011





NAGAO

真昼の太陽にアスファルト道路が熱く眩しい
ノロノロ重い荷車ひく馬も馬方も麦藁帽子……
人情の下町でバケツの水ガブ飲み一瞬の涼風

大東京の真ん中も昭和初めは馬糞だらけ
進駐軍ポイ捨てタバコもコロコロ銀座通り
拾いタバコに馬糞混ぜ密造^{ようもく}洋煙売る奴もいた

日比谷公園とかは「車馬通行止め」
もうそんな立て札都内どこにもありやしない
銀座の木挽町に馬小屋もあったけど……

カンカン照りに重い荷物は馬にゃ過酷だ
暑い国でロバの寡黙な重労働平気見て驚く
上野動物園でロバの一文字は最長寿だったし

猛暑に倒れた馬に日傘さす美人が眩しかった





テレビ初放送の昭和二十八年に戦後の日本脱出
美空ひばり年収八百万円で歌手日本一の年……
帰国したらプレスリーのロックが流行だった

いやあ！たった三年で日本は変わっちまった
オレより三年ちょいと若い太陽族にも遅れ……
演歌古いしロックンロールにもついて行けず

憧れのパリでもシャンソン聴こえなかったし
世界中何でもアメリカが流行ってたんだ
本場のシャンソンどうだったと聞かれて困った

欧米になかった慎太郎刈りアロハ姿が眩しい
三等でも世界一周の洋行帰りなのに
ハートブレイク・ホテルなんて歌えない、その遅れ

“もはや戦後ではない”が流行語だった





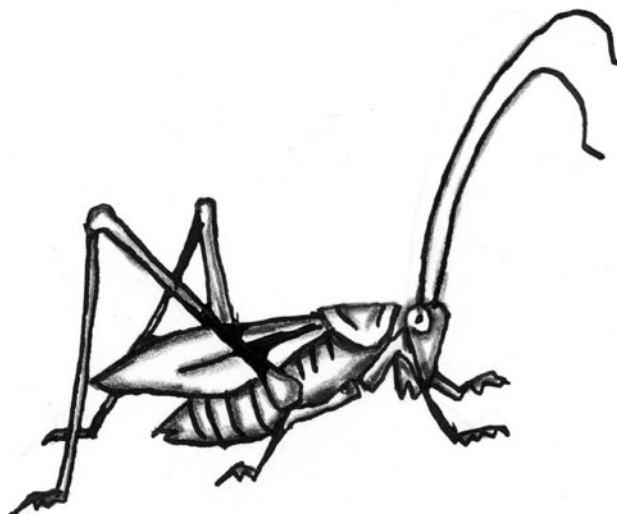
暑さ寒さも彼岸まで……孫に念仏うろうろ散歩
今年も同じ道端に咲いて待ってる曼珠沙華
彼岸過ぎればずっと消える名残の朱^{あか}哀れ

暑さ寒さ北半球も南半球も彼岸まで……
遥かなる南米移民隠れ仏教徒の墓は悲しい
十字架に南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華経の字

亡き友を偲ぶにしても増すばかり
アイツは死んじゃったよ同窓会の幹事ケロリ

往く道の吾が影は延び余命縮める彼岸花……
畦道や庭の外れで先祖偲べと咲き消える

小春日和の墓参りはピクニック気分の賑わい
でもねえ薄暗い本堂にゃ寄りつかない
坊さんぼやく秋彼岸





日本中の朝はコケコッコー！で目覚めた
ゴチャゴチャ東京の下町も鶏が朝を告げた
ミカン箱の鶏小屋にチャボの雌雄住まわせて……

卵目当てでも可愛がるでもなく飼う下町呑気
小屋にトタン、その上に縁日で買った植木鉢
時には金魚鉢だったりのゴチャゴチャ暮らし

戦争が始まると鶏は卵産むから大切に飼う
残飯とか野菜屑とか無くなり犬猫は飼えない
爆弾落ちだすと下町のコケコッコーも消えた

ガスも止まり外で粥など炊けば釜ごと盗まれた
鶏が卵なんか産めっこない戦中空虚な下町

小国寡^か民^{みん}のどこか遠くから飼い犬や鶏の声……
平和だなあ！ 古代中国の哲人“老子”の独り言





NAGAO

空青く大気爽涼とりあえず深呼吸
色鉛筆迷う紅葉黄葉^{もみじ こうよう}つまらないし……
アトリエに枯れ葉並べて縮んだ日が終わる

敗戦の焼け跡にリンゴの歌が流れた秋の日
可愛い歌手が唇よせるリンゴに目がいった
リンゴを自由に食えるなんて夢だったからね

下町の晩秋はゴミと枯れ葉の吹き溜まり
山の手の住宅地の枯れ葉は贅沢に色形豊かで
パリの枯れ葉は物悲しく似合うし……
ま、枯れ葉に追い越され往く人生の佗しさよ

絢爛たる秋……
静寂たる秋……
どっちか選んで絵にせよの宿題に迷った
皆で楽しく孤独で淋しく日替わりした若き日だ





ただいまの火事はあ～神田須田町二丁目え～！

ドーンドーン

歳末の夜に町会の人が大太鼓叩いて触れ回る

火事と聞いたらじっとして居られない親父

あいつのウチの近くだ、見舞いに行かなきゃ！

着くところにゃ鎮火でも呑気な野次馬人情の時代

翌日は近火お見舞い御礼の張り紙だらけだ

部屋の襖に火が這い上がってたけどさあ

着物着替え帯しめてから外へ飛び出たのよォ

町内の火事で粋な^{ほうかん}幫間の江戸っ子おかみさん

火事を見つけるのは消防署の火の見櫓だった

先ほどの火事はあ～鎮火あ～！ ドーンドーン

と、江戸の名残は消えても火事は消えないさ





NAGAO

バナナ、チョコレートなど贅沢品輸入制限
そんな敗戦後に米持参でスキーに行った
都内の駅までジロジロ見られて後ろめたかった

ラッキーストライク日本人も買って良し！
講和発効！ でもスキー場は占領されてたね
いいゲレンデから日本人は追い出された

ロープウェイ羨ましいな！ って遠く眺めた
クネクネ凸凹滑降でクタクタもう登れない

宿は麓の農家で飯が旨い！ 持参の米しまう
腹ペコでも遊びたかった戦後の青春だ

オンボロ列車の中でスキー客は邪魔もの
身を縮めながら「来年も……」とひそひそ話





NAGAO

夢の二〇〇〇年代も入ってみりゃ未来は不安……
で、一九七〇年代の昭和レトロで心を癒す
ま、三十年ぐらい前なら古き良き時代なのさ

太古の人なら寿命せいぜい三十年
古代人の古き良き時代って幼い頃の春うらら
現代の古き良き時代は二度も三度も狡い長生き

三十年ぐらい前は誰にもそれなりに懐しい
子供だった青春だった仕事してた退職した……

何十年も放ったらかしの写真を整理し始めた
七〇年代に及ぶと白黒とカラーが入り混じる
景気いい時は高価なカラー写真が多いのだ

その三十年前は軍服だらけの黄ばんだ戦時色……





日本女性のイメージ変わった！
外国からの想像は少女マンガの女の子？
可愛いカワイイは K a w a i i 世界語

昔は日本女性との結婚が人気世界一だったよ
美しくて……おとなしくて……辛抱強くて……
西洋人と結婚なんて縁遠い日本娘たちの夢話

若い頃パリで観たショーの中の日本女性は
みな吊り目の黄色い仮面で無表情の気味悪さ
他の国の女性表現はそれぞれに顔のある賑々しさ

日系移民の一世はその国の言葉が話せない
二世は敗戦国の日本語より当地の国語で話す
三世はしょせん日本人顔だし日本語も話す
四世五世のキモノ姿似合って K a w a i i





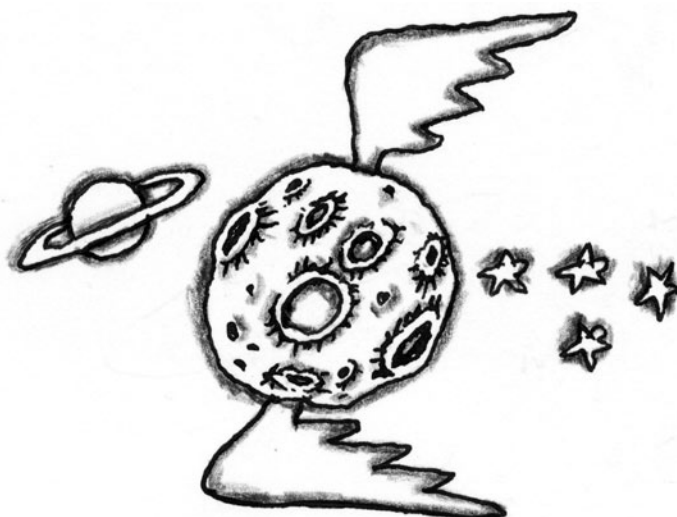
春や春、ああ春南方のロマンス……

懐かしの活弁士語る恋愛映画の口上

南米の夜空に妖しく美しい光の輪が流れた
ガスの炎状に光り、無音高速で頭上を飛び去り、
当地大学のスズキ・タケシ教授も目撃大興奮
一九五四年ごろサンパウロの空の下、夢不安……

数年後の日本でU F Oなる新語を聞いた
新人作家の挿絵仕事で文中にU F O新登場
慌てて科学雑誌編集部を訪ね写真を見て驚く
南米上空に見た妙な飛行体もU F Oだった？

新人・永六輔が主人公をU F Oで登場させた
U F Oは有楽町上空に現れ主人公を降ろす
挿絵も新語の「イラスト」でU F Oと共に春の巷……





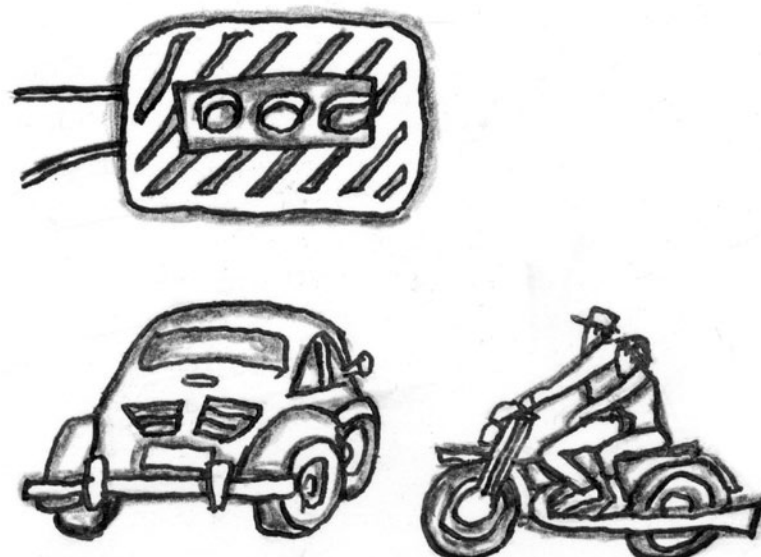
NAGAO

一九五七年、外国車ルノーを買った！
中古車でも自家用車だから皆ビックリ！
独身青年で世界一周の洋行帰りで外車持ち！

でも擦り切れタイヤは毎日のようにパンクした
都心は材木敷いた道路工事でクギだらけ……
日本の道路は木で出来てる！と外国の報道

日本中の道路は凸凹で車走りと土砂埃の煙幕
米軍専用路はオイルを撒いて数日は平ちゃら
米車の燃費も五寸釘で穴開けて走るほどの贅沢

若いからオンボロ車で凸凹道路を遠出したね
賑かに友だち乗せて坂登れば車はガタガタ
優しい道路の欧州車は凸凹路にゃ弱いのだ
エンジン焼け車軸折れ……帰路は電車で大恥





二十世紀末、一九九六年の大風吹いた或る翌朝
散歩の道に大きなサボテンの葉が落ちていた
帰宅して玄関脇の小さな庭の隅に置く
二十一世紀を越え、サボテンは樹木になった

大風が来るころサボテンの大きな葉を剪定する
冬はじっと堪え、初夏には葉が増えて育った
やがて冬も大風も平気な樹になり花も咲いた

往来する人が立止まり見上げる樹になった
地球が温暖化してるんだなあ、と……
肥料も水もやらず放っといたんだけどねえ

二十一世紀になり北米疲れ南米元気になった
砂漠が増えても、サボテン元気
育てないのに育つサボテンを眺め生きるか……





下町、夏の夕空にポンポンと煙花火が上がる
隅田川の花火大会が始まるぞ
夕飯そこそこ、下駄っつけ大川端まで走る
隣り町そのまた隣り町に行くほどに花火は大きい

昭和初めの下町に高いビルなんて数えるほどさ
隅田川の大花火はどこからでも見えたよ
でも行くほどに大人が多く、子供にゃ見えなかった
鼻緒切れそうに駆けて行けば終わりの大花火

やがてキナ臭い時代になり花火大会は消え……
間もなく下町の夜空いっぱい悪魔の花火が……
夜空キラキラ焼夷弾ドカドカ大川に屍が流れた

いま、花火の夜は可愛い浴衣賑々しく浅草あたり
昭和初め、近ごろほど浴衣着て来なかったなあ……





雨ニモマケる

風ニモマケる

夏ノ暑サニモマケる

カンカン照りにも逆らわず

木陰でもあれば、お陰さまで

大自然には逆らわず負けて得ましょう

チロ～ン

風鈴が可愛い音で少しの風を呼ぶ

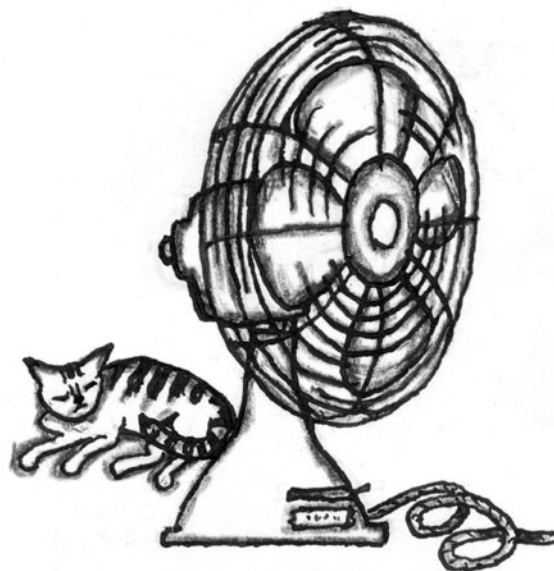
鉄の扇風機ガラガラ回り昼寝に危い、止める

昭和の夏は季節にまかせダラダラ過ごした

百貨店に行けば冷房がタダで楽しかった

下町の子らに家族ぐるみ避暑遊びなんて夢

通りを暑苦しい戦車の行進、兵隊さん暑そう





河童の絵を描いてください……

河童収集家なる見知らぬ人から手紙がきた

河童の絵を描くのは初めて

河童化物が流行ると世の中不安で不景気

世界大恐慌下に生まれ育った子供の頃聞いた

河童を愛し描いた芥川龍之介が自殺した時代

不安な衆は演芸娯楽で気分紛らわす

映画館もトーキーになって賑々しくなった

洋画邦画…恋愛悲喜活劇…化物…股旅…

河童～カッパ～合羽からげて三度笠

河童の旅姿描いて河童収集家に郵送した

河童はキュウリ大好き夏が好き

河童も芥川龍之介も夏よさらばと旅立った





丸の内も有楽町も空地だらけだったな……
勝利の日までビル建設もじっと我慢の空地だ
ふと秋風に戦争知らないバッタが跳ね遊ぶ

虫籠のバッタ眺める軍国少年……
戦中平気のバッタ雌雄が仲良く交わっている
イナゴなら甘辛煮にして食っちゃうんだぞ！
天高く腹減る昭和の軍国少年つぶやいた

サイレンが鳴った、空襲警報だ！
家の前の路に浅く掘った防空壕に駆け込む
向かいの置家の芸者も飛び込み、壕内は二人きり

近くに爆弾が落ち、キャッ！と抱きつかれた
少年の大和魂が凹み、チロチロと秋の虫が笑う
綺麗な芸子だったよ……昭和老人の淡い自慢話





NAQAO

柿はブラジルでも Kaki っていうんだ
日本と同じが一つでもありゃホッとしたよ
日系老一世ポツリ「移民五十年祭りだ」
その開拓者たちはもういない……百年祭も過ぎた

カフェ（コーヒー）初めて飲んだら苦くて
マンティーマガ（バター）未知の臭みに鼻つまむ
サラメ（ソーセージ）は吐き出したかった
伊太利うどん（マカロニ）なんとか食えた
昔の日本人は初めての異国ですべてが辛かった

野口英世の助手したという老医師がいたころ
そのユカタン州ただ一人の老日系人もいた
ダツン（ダットサン）の修理工場始めた人も
米墨国境に歯科医を開いた老日系一世もいた
小さな開拓者たちはひとりずつ消え去るだけ……





下町の歳末餅つきは米屋にきまっていたもんよ
 店頭の道路に^{むしろ}筵敷き臼置き威勢よく餅ついた
 奥から^{せい}蒸籠のふかしたてが湯気ごと運ばれ……

繁盛してる米屋は新式機械で餅ついた
 ニュルニュル出てきて餅がとぐろ巻く
 日本髪のおかみさんたちも餅作りに賑々しい
 坊やハイ！ つきたての^{あん}餡ころ餅貰えて嬉しい

昭和十六年十二月八日太平洋戦争が始まった
 田舎から栗餅など送って貰うようになり……
 米店前に落ちた米粒を拾うようにさえなった

「沢山食べて大きく育て」って言っていたのに
 食べ物なくなる時って忘れた頃やってくるよ
 もし世界中が……なんて考えた事なかったけど





NAGAO

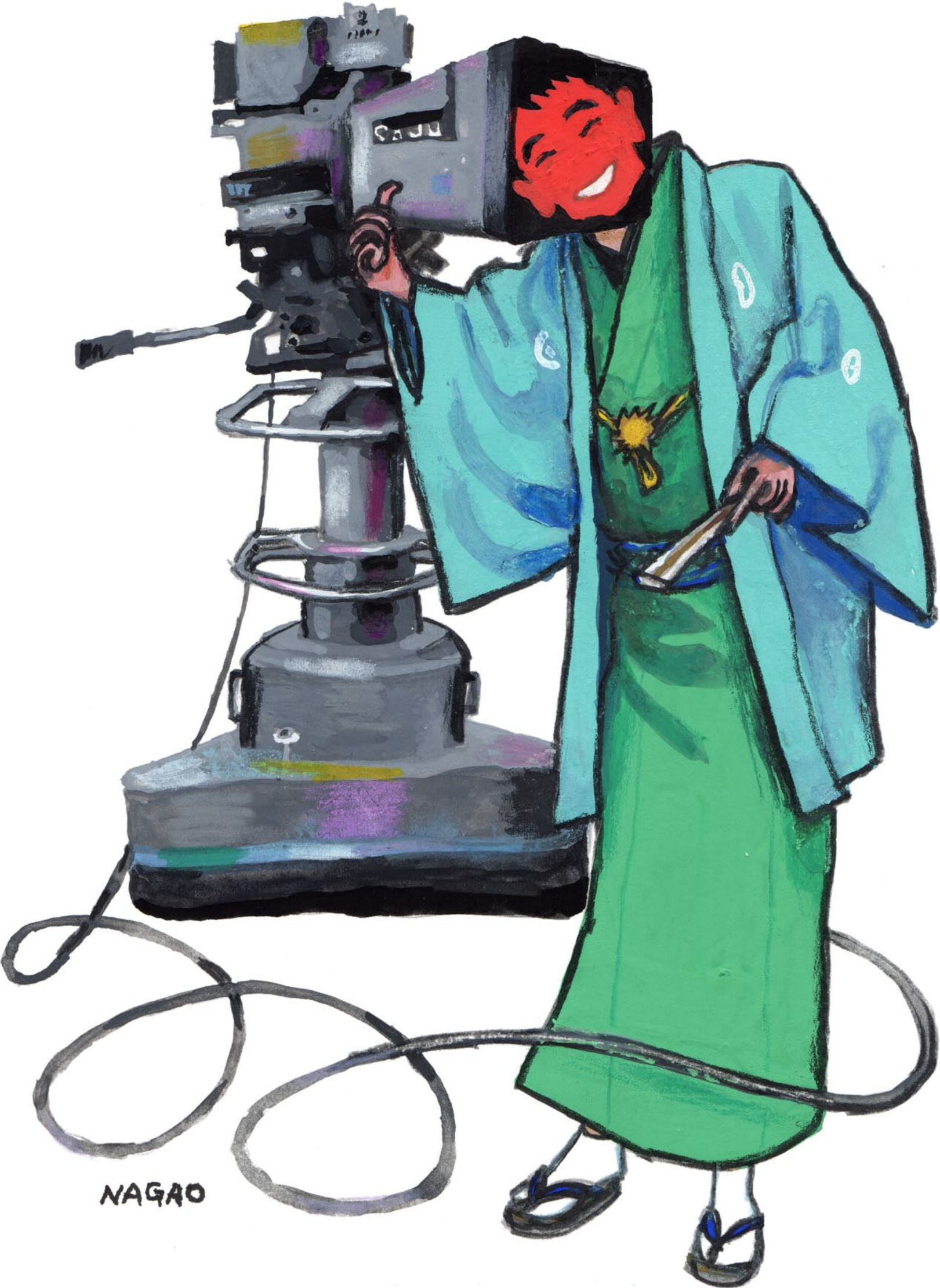
冬のコート作るの初めてだ生地取寄せなきゃ
真夏のサンパウロで仕立屋が慌て^{さわ}躁ぎ張り切る
南国で真冬のヨーロッパへの旅仕度……

船が赤道を越えると夏から冬のヨーロッパ
敗戦後のローマには戦車の残骸も震えていた
南国仕立ての冬コートは生地が薄くて震えた

パリは記録的寒波でセーヌには氷が流れ……
ブラジルでの売絵の貯えも心細くなり凍えた
宿は屋根裏でもパリ流行の暖かい上着を買おう
芸術のパリだ絵描きらしくベレー帽も……

ん？ 運転手や道路工夫もベレー被ってるぞ……
そうか戦争で途切れた古いイメージと知る
帰国すると漫画家とかベレー帽が似合ってる
パリ仕込みのベレー帽ジャケット姿がウケた





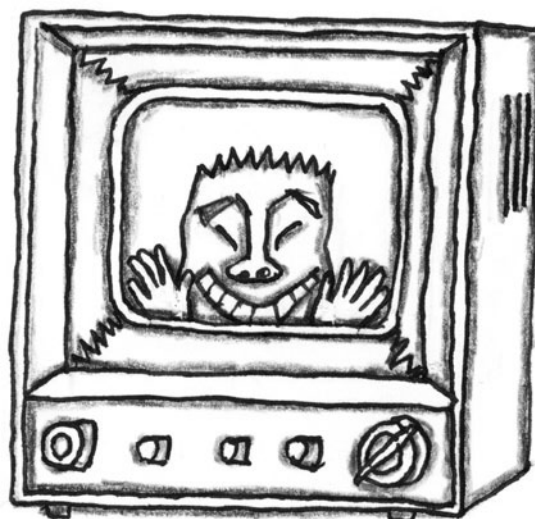
画伯がテレビで喋ったり表情を見せるの迷惑
普通人と同じ仕草じゃ絵を高く売り難いんだ
絵描き駆け出しの頃ふと耳にした画商の愚痴……

作家先生がテレビに出るたび本の部数おちた
読書家はテレビ文化人を軽視していたからね
出版人は先生がテレビに出る度に心配だった

映画の大スターはテレビに出ないのが誇り！
粗雑な生放送のテレビ紙芝居に出るのも怖い！

昭和半ば友人のプロ芸能司会者が廃業！何故？
アナウンサーが芸能司会しだすしさあ……
芸人が番組司会やりだすし……プロ司会者不要さ

二十一世紀は作家も画家も学者も政治家も……
テレビに出て売る文化の芸能化時代になった





心の…政治の…経済の…三時代の繰返し
六十年ずつ百八十年ワンセットの人間社会史
中国古代からの教え？ 一時代六十年が限界！

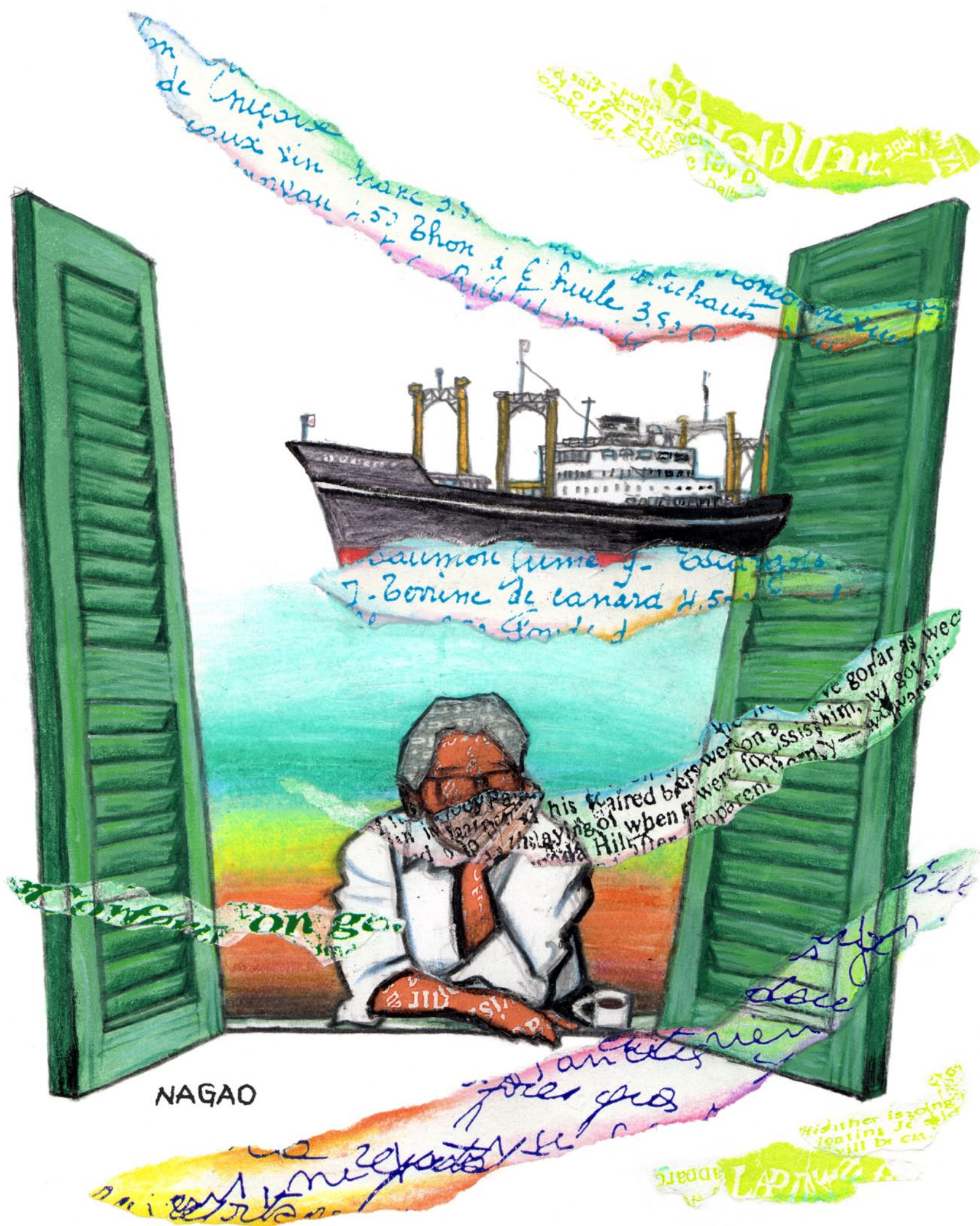
一九八〇年ごろからは心の時代？
ハート図柄を若者がやたら使いだしたところ……
少女漫画とか愛の表現に文より楽でカワイイと

ハートなんてトランプでしか見なかった
胸からハートが飛出す漫画見て不可解だった
グリコの飴みたいだなと子供のころは思ったよ

戦争になると欧米風のハート図形は消えた
終戦後もハートに馴染めない日本人だった

平和だ愛だ孤独だ自殺だ心理だ脳科学だ……
ハート図形だらけの……やっぱり心の時代かも？





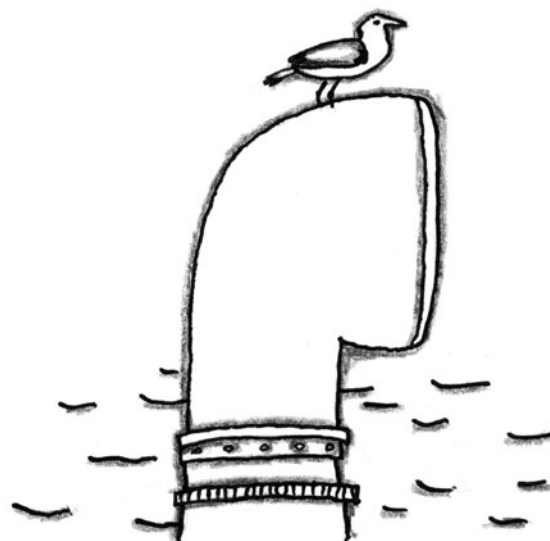
東京湾の東風^{こち はしゃ}に燥いだ早春の船出が想い浮かぶ
 新造貨客船さんとす丸で、一九五三年の春だった
 三年後、イタリア船フランス船乗り継いで帰国。

「長尾さんが乗った船の生涯を調べましたよ」
 未知の船マニアから手紙がきた。
 さんとす丸はパナマに売られ台湾に売られ……
 一九七六年、高雄で解体されました

イタリア移民船アンナは長尾さんと誕生同じ
 一九二九年竣工し、一九七一年イタリアで解体

フランス客船ベトナムは香港に売られ巡礼船
 シンガポール停泊中に火災を出して台湾で解体……

年老いて乗った豪華船飛鳥^{あすか}も他国に売られた
 いやあ！ 流れ流され生者必滅の人生航路だったなあ





未練たらしく春惜しむ、淋しさケロリ爽やか五月
 春はまた来たけれど青春は戻っちゃ来ないよ
 でもね、薫風^{くんぷう}に撫^なでられりゃあ妙に欲が出てさあ……

年取りゃ「死に欲」出るんだ
 年寄りから聞かされ、分からなかった
 若返り、美食、名誉、財産……と欲無限
 五月は老人の「死に欲」が出る晩春と分かってきた

婆さん美肌欲……爺さん名誉欲……
 五月晴れ、老人ばかりの長生き散歩に吾もあり
 若い時や、そんな無理してまで生きたくなかった

葉桜は欲だらけの姥桜^{うば}……咲いた日があるからね
 ま、誰にも咲いた春はあるもんよ

妙なもんで苦しかった青春も楽しく思い出す
 昔イケメン今フケメン。老人の好都合な思い出——





母校の京橋小学校から創立百周年の通知がきた
新入学のころは二十数周年、ピカピカ校舎だった
関東大震災後の世界大恐慌で昭和大貧乏時代

小学校の昼弁当なんて貧しいもんだった
弁当箱開けると海苔が蓋にベッタリついて……
オカズそれだけのノリ弁は普通だったさ
大恐慌の貧乏後遺症は数年続いたからねえ

それから八十年過ぎたら……
方々に大震災あって同じ世界大恐慌がきた
あのころの昭和っ子は贅沢知らずで平気だった
坊っちゃん刈りの裕福な子も祖末な弁当でさ

近所の小劇場で「蟹工船」大当たりした昭和四年……
八十年後の平成大恐慌前にも蟹工船再ヒット
ま、初期の昭和っ子は国富めども慢性貧乏症なのさ





憧れのアメリカ第一歩……一九五三年

「カロード駄目！」に驚いた

トイレや乗合いバスとか白人優先なのだ

同行の日本人E君がオレは君より白いと喜ぶ

腕を並べると僕は彼の肌より微妙にカロード

どうする？ 不安な二人はカロード用に入った

敗戦後の「日本人立入り禁止」馴れしてたし……

その十年後。二十万人のワシントン大行進

「私には夢がある！」キング牧師が叫び

その半世紀後、「チェンジ！」と叫びオバマ大統領

やや白肌のE君はその後メキシコで逝った

この夏も暑い！私の黄肌もやや日焼けした

アメリカは熱く暑い夏かも？

昼寝でもして若き日の世界旅の夢でも見よう





NAGAO

八十歳になった！

ブツダ八十歳の生涯を八十枚の絵に描いた……

末期高齢それなりに役立ちそう、生きていよう

七十歳になった時これで終わり？ と慌てたね

七十一歳になってパソコンやりだし世に^{すが}縋る

でも世間は若さへの流れ、追い越せっこねえ

六十歳代は仕事の達人気分でパソコンを笑う

やたら同世代と出会い安心しながら世に^{おく}後れた

五十歳代は新車に目移り三四十代の若さ気分

三十代は新語「イラスト」掲げて稼ぎ家を建てた

二十代は無知の無銭旅行で世界一周できた

十代は戦争勝つ気で陸軍特別幹部候補生になり

皺くちゃまで生きたくない！ 娘時代の姉が言ってた

その姉八十八歳になり、末弟の私が介護する今……





NAGAO

若き日の南国に未練たらしい別れの残暑
画用紙に落葉並べ暇潰す半端な季節がくる

「お店の手描きポスター描かせて下さい！」
焼跡に新築の飲食店など見つけ次第飛び込んだ
残暑の巷を注文取り歩いた空腹の学生時代……
戦後だから紙を手に入れるのが先決でさ

南米サンパウロでの第一歩はE君と絵を売り歩いた
Eは「百号のでかい絵ででかく稼ぐんだ！」
僕は「ゼロ号の小さい絵で楽に売り歩くよ」
百号は高くて売れず、ゼロ号は気楽に売れた

E「大作売りメキシコに永住し大作を創る」
僕「絵売り歩いて稼ぎ憧れの欧州に行くよ」
炎天下トラックや馬車の土埃に包まれ歩いた
Eはメキシコに眠り、僕は日本で未だ落ち着けず……





ん？ 秋風かあ！ そわそわ落ち着かない季節
 テーブルに陽射しも延びて、心の旅路が始まる
 物置で、干からびた古い旅行鞆は眠り続けているけれど

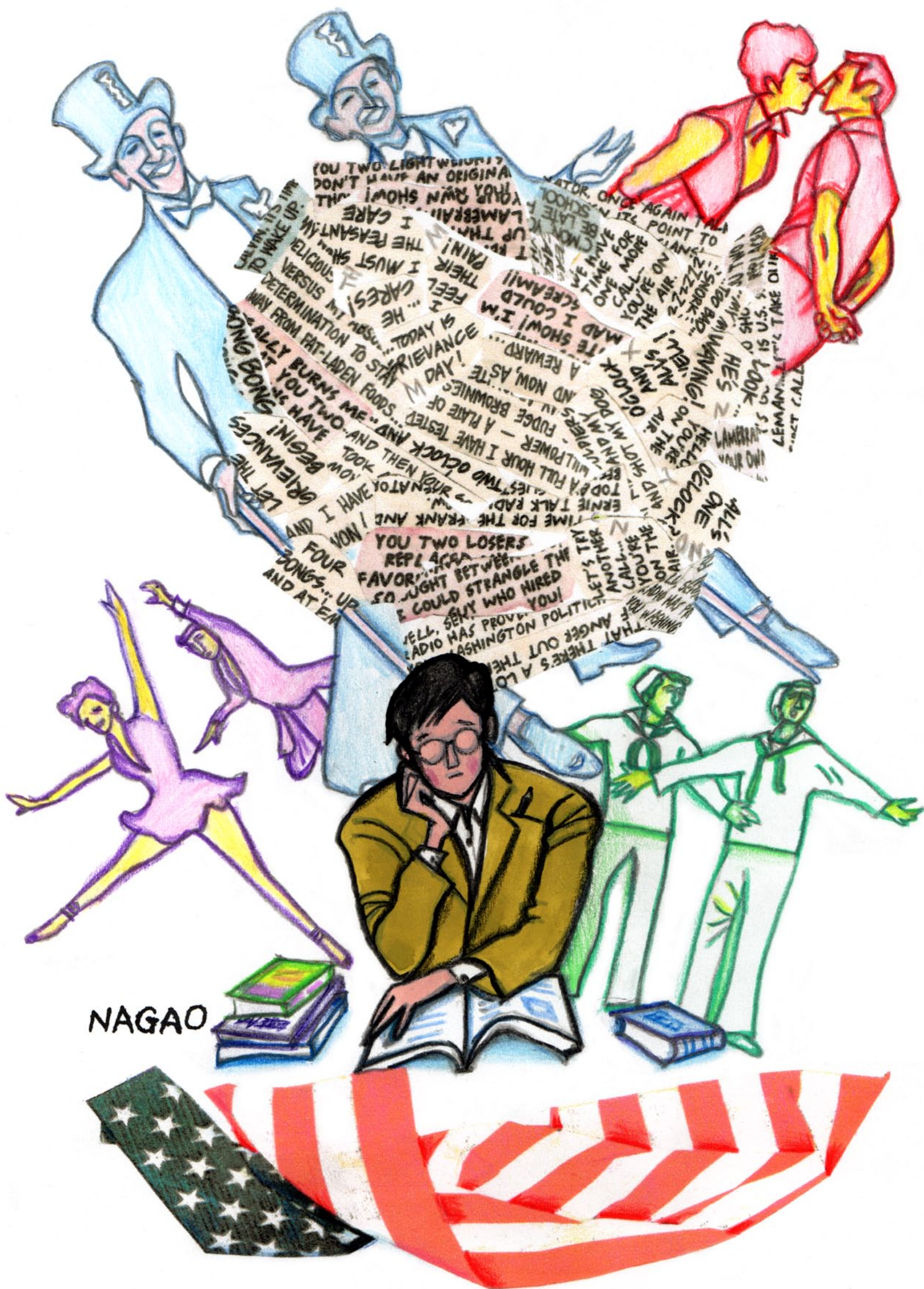
戦後日本人の外国旅行は毎日が文化刺激疲れ
 古い旅行鞆も、卑屈に歩み続けてくたびれた

浴室の噴水あげるビデにも文化ショック！
 「これは洗眼やウガイ用なのだ」
 東大出のエリート F 君に自信満々説明された

旅行鞆には下駄やステテコも詰め旅に出た
 下宿先の物干しにステテコ吊し隣人驚いた
 「ズボン下はくなんて超贅沢！ 君は貴族？」

下駄で庭に出りゃ嘲笑され……浴衣を着れば女装？
 と、隣室の男に抱きつかれ……日本青年は疲れたよ





読書の秋でも読みたい本がない戦中……

図書館や本屋には国粹主義の本だけ並ぶ

戦前の自由平和な本はコソコソ回し読み

いや、戦中は国策的な本さえも作れなかった

紙があっても、製本する糊さえなかったんだ

南国のタピオカ芋なんかも糊の材料にしてた

それも製本屋家族はパンにして食っちゃった

終戦で軍用の紙が闇市に流れ……

紙が手に入ったから本を出す出版社

娯楽もないし雑誌が出りゃ良書も悪書もよく売れた

戦後日本の大企業、上位に出版社も並んだもんだ

買えないアメリカの書籍雑誌にも触れたい！

日比谷の米軍C I E図書館は日本人もOK

英和辞典抱えて通い、アメリカ文化に心酔したっけ





異国での賑やかな歳末は寂しい
在日の外国人も日本の師走は寂しい
故郷と違う習慣の中で、ひとり今年が終わる寂しさ

イタリー移民船でのクリスマスも寂しかった
船底の三等客イタリー人は大はしゃぎの明るさ
ほとんどが南米での移民失敗組なのに歌い踊る聖夜
日本青年ひとり明日を怯えた歳末の欧州航路……

昭和のはじめ子供のころ聞いた歳末の溜息
欧州はクリスマスイブの自殺女性多いってさ
翌年三十路のお姉さん溜息ついてたっけ
むかしは年越せば皆同時に一歳年とったんだ

あそこの旦那は大晦日は山手線乗り続けよお
借金取り逃れにグルグル乗りっ放すってわけ
除夜の鐘鳴りゃあ来年のツケに目出度しだあ





子供のころ、一日の小遣い三銭、姉は五銭
その格差は大きい！ 紙芝居屋の菓子が一銭だ
兄弟姉妹の格差そのまま続き、末のボク^{ひが}僻んだ

家の経済に子供は敏感。不況時には黙るし、
親と百貨店に行っても買えそうな物をねだる
オモチャ売場でダダこねる奴は金持ちの子だ

一ドルが三百六十円、ヤミで五百円の敗戦後、
十六万三千八百円払い、貨物船で日本を出た
美空ひばり年収四百六十万円で国中驚いたころ
栈橋で友が選別にくれた十ドルだけ懐に出港

その半世紀後、あれよあれよと日本はリッチに
中国・深圳が田畑広がる貧しい田舎だったころ
日本円高く、中国の旅は安価優越的楽々だった
その数十年後、中国セレブが続々優越的訪日だ





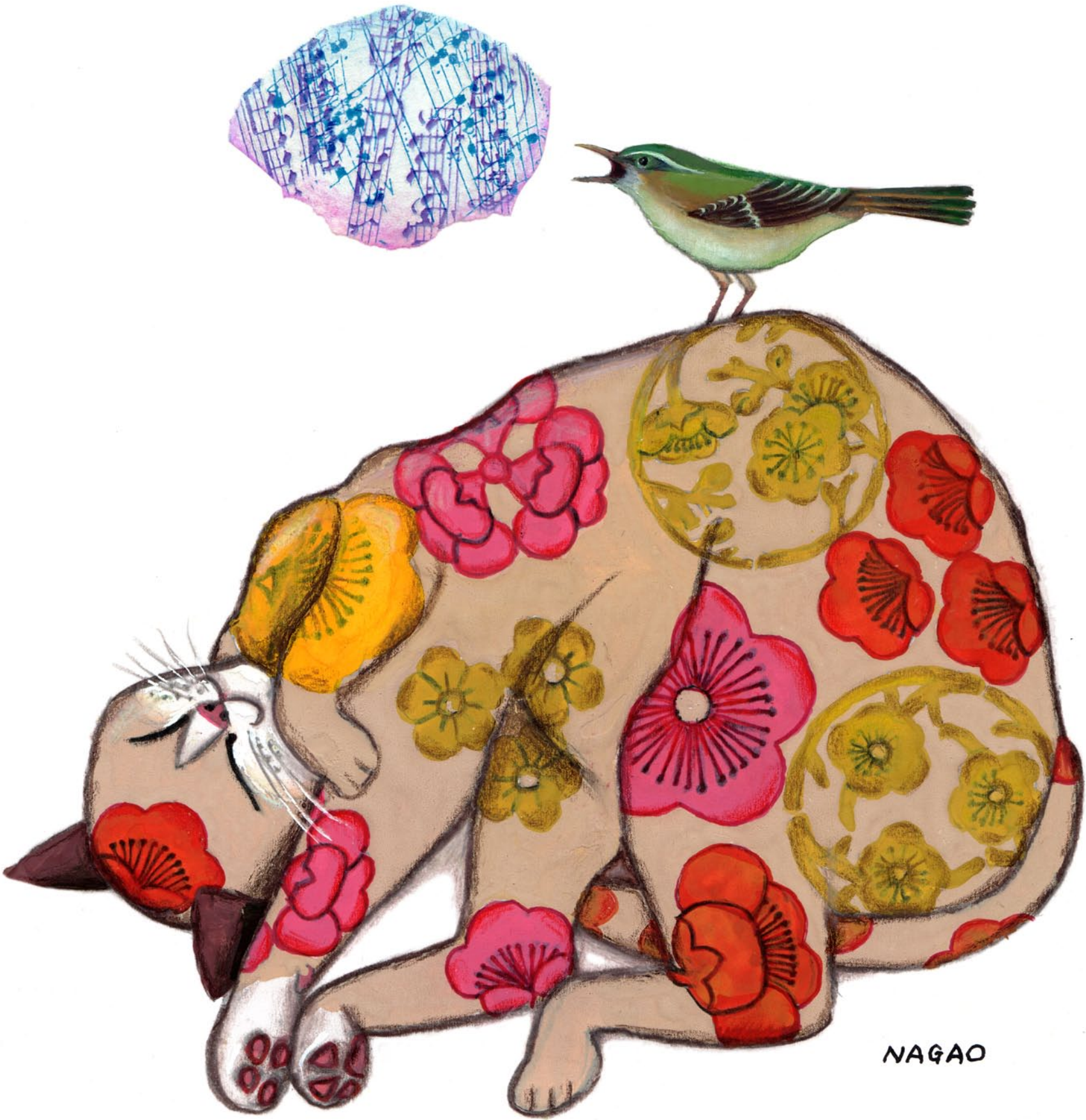
沙羅双樹の花咲き散る下で釈迦八十歳の入滅
四月咲く沙羅の花がその二月十五日咲き散る
美しく？ 悲しく？ と涅槃の図を描く

古代印度王家のプリンスがブッダになった！
モテモテの長身ハンサムが粗衣粗食の独り旅
その苦楽大落差の中で悟った八十歳の生涯……
ブツブツ私の八十歳なんだった？ と涅槃図描く

二千数百年前に八十歳生きるってのは凄い！
今でさえ長寿国の平均寿命を超える八十歳だ
遍歴苦行途中に一本の菩提樹下で悟りを得た
それから沙羅双樹の下までゆっくり充分の生涯

私の場合、くよくよ苦楽むちゃくちゃの生涯だ
でもね、ブッダの生涯に感じる余裕は生まれた
ま、生まれりゃ消える命……ゆっくり絵でも描こう





NAGAO

ホーホケキョ！

芸者屋さんちの三毛猫も昼寝の耳ピクリ

近所の床屋から鳥籠の鶯が下町に春を告げる

この間までチッチッチと冬鳴きだった

鶯の糞は白肌化粧品用に売られて銭になるって

そりゃあ髪結い屋さんちでも鶯飼ってる

顔にクソ塗って美人に？

女の度胸にわが子供心ビックリの春がきた

床屋の鶯^{のどか}長閑に昭和初めの春うらら

向かいの芸者置き屋のアヤメ姉さん大欠伸

色黒で馬面^{うまづら}アヤメ姉さん売れないヒマ芸者

三軒隣りの花井姉さんは昼から人力車大忙し

東京大空襲のサイレン鳴り放しだった春三月

春のうららの隅田川は屍の川になった……





お花見に連れてってやる！
この不景気にお父ちゃんが立派に見えた
お花見はやけくその酔っ払いだらけだった

サイタサイタ サクラガサイタ……
国語読本初めの頁は桜満開の美しい挿絵入り
尋常小学一年生になった

花は吉野に嵐吹く
大和おのこと生まれきて、散兵戦の華と散る……
桜は勇ましい軍歌になり軍国日本になった

聞け万国の労働者……
軍歌と同じ曲で詩が変わり敗戦国日本になった

平和日本になって半世紀、国中桜だらけ
武士軍人に平和に環境に観光に桜は休めない





NAGAO

地球の南北半球どちらも一番いい季節は五月
 日本は緑の早苗月ブラジル辺りは聖五月
 こちらは夏浅くあちらは秋深く……心地いい時

天高く鯉幟およぐコーヒー園……ヘンな俳句だ
 春秋の季語ともどもに楽しき日系世界の風景
 南米の日本人街には柏餅あれば柿もある五月

異国永住すれば母国の感覚から離れたくない
 外国人の心は生涯母国を祖国を慕い続ける
 五月の爽やかな風が香りが故郷と同じになる

こんな国イヤ！母国捨て地球の向こう側
 行く春？ 行く夏？ 妙に爽やか冷淡に風薫る
 サンパウロでシドニーで演歌唄う五月さつきやみ闇

やがて故郷で歳をとり異国の風香り偲ぶ五月





父の日は母の日よりもつまらない
父の日六月は母の日五月の残りもの……
子も孫もお母さーんママーと呼び続け育った

雨上がり六月ふと気がつけば私の誕生日
父の日無縁に祖父の日なくフツーのお爺さん
昭和の初めごろ親父や爺さん威張ってた

昔から戦中の身なり男子は派手女子は地味
布地不足でも将校の軍服は立派で女子は質素
平和になるや女子のおしゃれ追っかけ無限……
お父さんよりお母さんが偉くなる

女性が贅沢する時代は平和なのだ！
男が威張る時は危い時代なのだ！
不況時は女性も働きだすので化粧品が売れる
爺さんになった私は無欲になろう！





夏休み！といわれても、行く所も銭もない学生
敗戦後が終戦後になり平和になった……
アルバイトというドイツ語が流行り、学生働く
日本橋・三越の前で宝籤売りして銭を得た

景色いい野山へ行って贅沢なキャンプしよう
戦中軍用のテント飯盒携え学友たちと旅に出た
箱根の山間に緑の平地！最適だとテント張る
僅かの米と芋で腹満たし満天の星眺め大合唱

真夜中の大雨でテントの中は胸まで大洪水
米と芋の体は凍え「もう駄目だ死ぬ」と喚く
遠い親戚のヨシコちゃんが脳裏に現れた

提灯振って村人が救助にきてくれ助かった！
雨が降れば池になる窪地だったのだ
帰るやヨシコちゃん昨夜亡くなった……だった





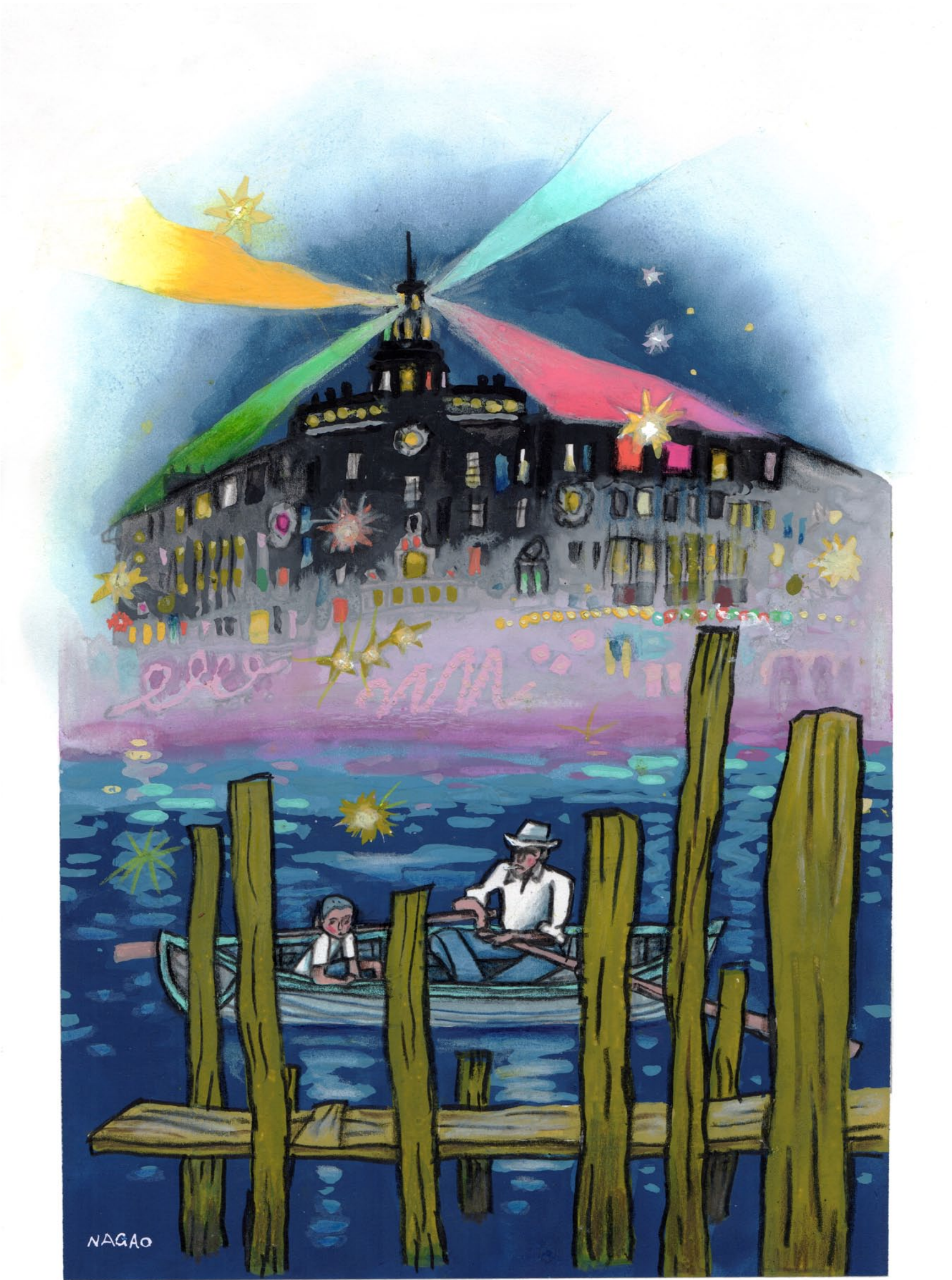
中南米人は昼寝まで少し、昼寝から少し働く
出勤間もなく帰宅し昼寝し出勤し夕方帰宅……
昼寝を中心にノンビリ少し働く一日
残る仕事は明日やるアスタマニャーナなのだ

勤勉貧乏性日本人が日曜日も働き^{ひんしゆく}蟬聲かった
ほとんどがキリスト教徒の中南米で日曜は働かない
勤勉貧乏性遺伝子の私は毎日イライラ過ごした
路で駆けるな泥棒と疑われる！と忠告された

メキシコ南部ユカタンの昼も街全部が熟睡
店はシャッターを閉め食堂も休み喉渴き空腹だ
太陽頭上ギラギラ汗ダラダラ歩く俺は馬鹿？

二十世紀終わるところから欧米的先進国疲れてきた
世界の田舎ブラジルが世界の大国になりそう
日本から出稼ぎに行く時が再び来るかも……





NAGAO

子供のころ……

下町の夏はトタン屋根の下、昼暑く夜蒸し暑い
夜は橋の上に縁台運んで寝過ごす者もいた
いま、その川や堀は高速道路になって味けない

東京の下町は川や堀に囲まれていた
ダルマ船、つり船、ボート、歌舞伎役者の船乗り込み……
下町の川や堀はいつ眺めても飽きなかった

ウチの丁稚小僧が成長し、ボクをボートに誘う
都会のネオンやサーチライトが川面に遊ぶ……
ボートは京橋から数寄屋橋どこへでも行けた
昼見りゃゴミの川でも暑いので泳ぐ男もいた

やがて下町の町工場も軍需景気で川を汚した
敗戦で平和になると数寄屋橋でも魚が釣れた
そして東京の川が高速道路になり、空が汚れた……





残暑にふと涼風、そして夜が長くなり……
銀座の夜に文壇画壇の一流センセ顔見せ歩く
新宿に作家画家演劇界隈の若者文芸も花開く
新聞雑誌文化爛熟繁盛ピークの昭和後期……

小説に挿絵描いた駆け出しのころ
作家が売れっ子なら挿絵画家の名も出て多忙
作家の行方次第と銀座新宿六本木を飲み歩く
銀座で挿絵と言ひ新宿ではイラストレーター

ああ築地のあの店の鯔が喰いたい！
箱根の宿で連載小説執筆中の大先生が独り言……
新聞社へりでその鯔が届いたと聞き恐れ入った

夜が長くなっても銀座の夜は短くなった
新宿は夜も昼も雑多文化ギラギラ……
読書（？）するデジタルメディアの夜長かな





国敗れ銀座の柳散り明治節は文化の日に変化
銃を捨てた翌年から自由平和と文化の日本国
日展・二科展・院展……賑やかに芸術の秋が来た
じゃあ画家になろう！と決めたのだ

三・四歳男児は戦勝祈願の軍服姿もいた戦時
菓子配給制で千歳飴の袋に目移りした七五三
三・四歳男児は戦勝祈願の軍服姿もいた……
明治節消えても明治神宮詣で続く平和秋晴れ

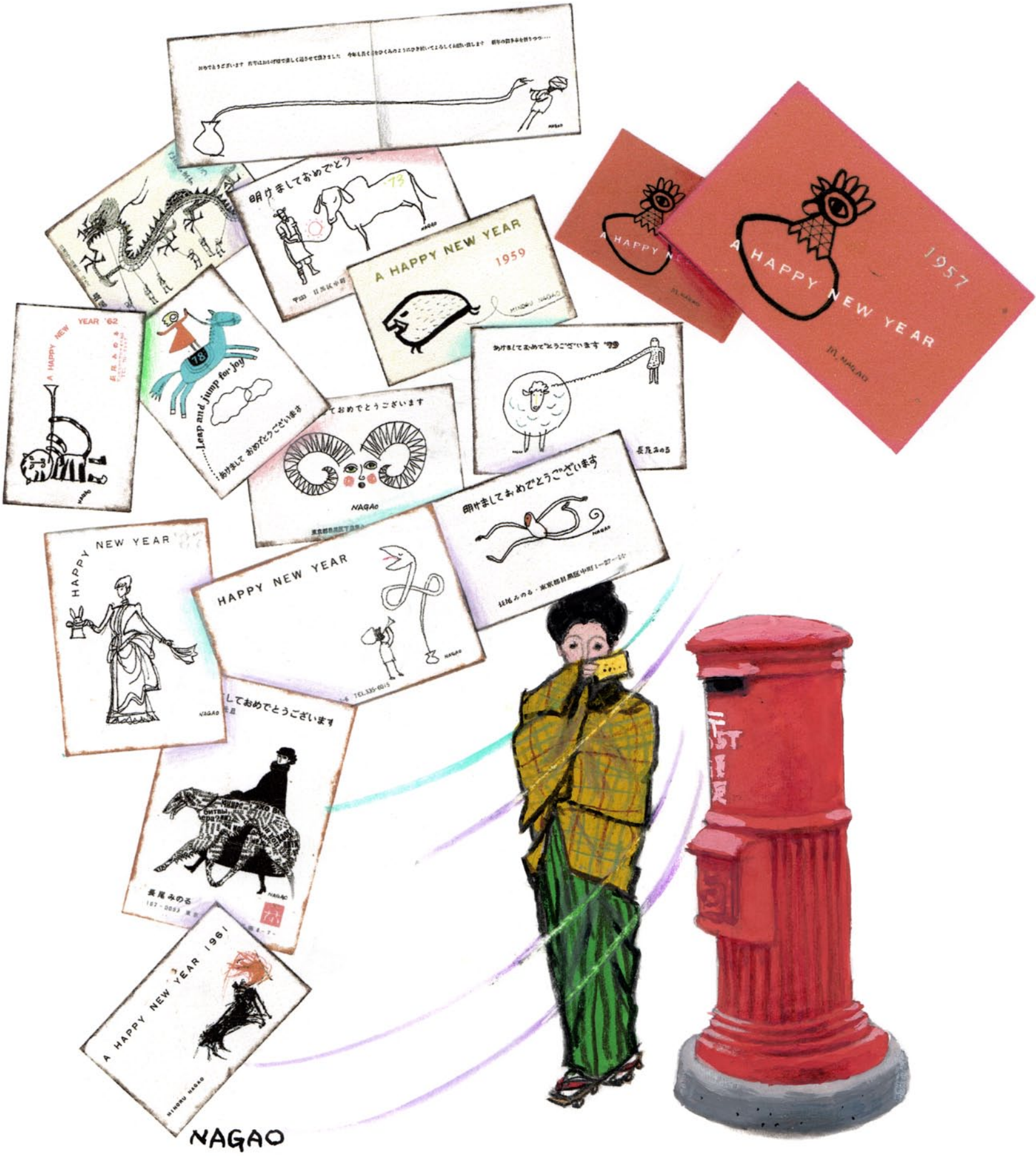
七五三なんて関東だけ——香川生まれの親父が言う
末っ子のボクに七五三祝いの思い出がない……
兄姉のころは好景気で派手な祝いの写真がある
世界大恐慌のトバッチリが末っ子にまで及んだ

昭和初期生まれは大戦争のトバッチリだらけさ
修学旅行の思い出も末っ子のボクだけ無いよ





NAGAO



正月も七草過ぎれば普通の日だけど……

子供のころは学校始まっても月一杯は正月気分
大人だって月半ば過ぎても仕事に身が入らない

昔の正月はなんだかんだと長かった

今年は年賀状何枚きたかと数え直して正月終わる
毛筆書きからペン書きへ万年筆へと変わった葉書

昭和三十二年の年賀状から印刷に決断！

ガリ版刷りの年賀葉書でも当時は新鮮！

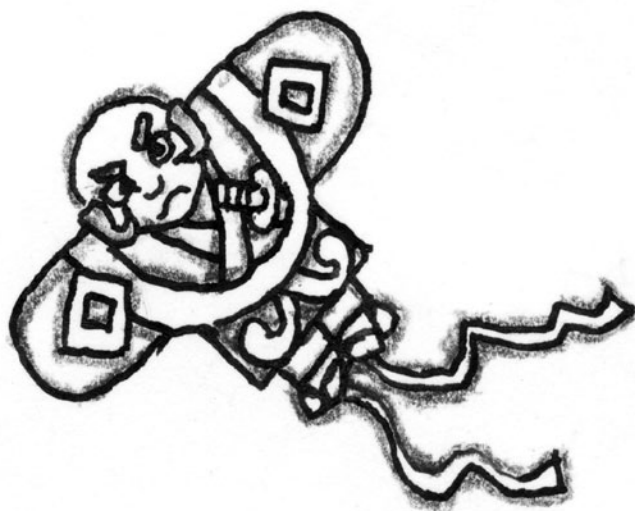
切手代四円でも宛名手書きでも平ちゃらだった

小説挿絵の仕事もあって作家にも賀状を送る

売れっ子作家先生からも手書きで返信がきた

駆け出しの僕が印刷葉書で無礼だったか……

ワープロ・FAX・メールへと……賀状の進化が空しい





貧しい数人で踊り遊んだのが始まりさ……

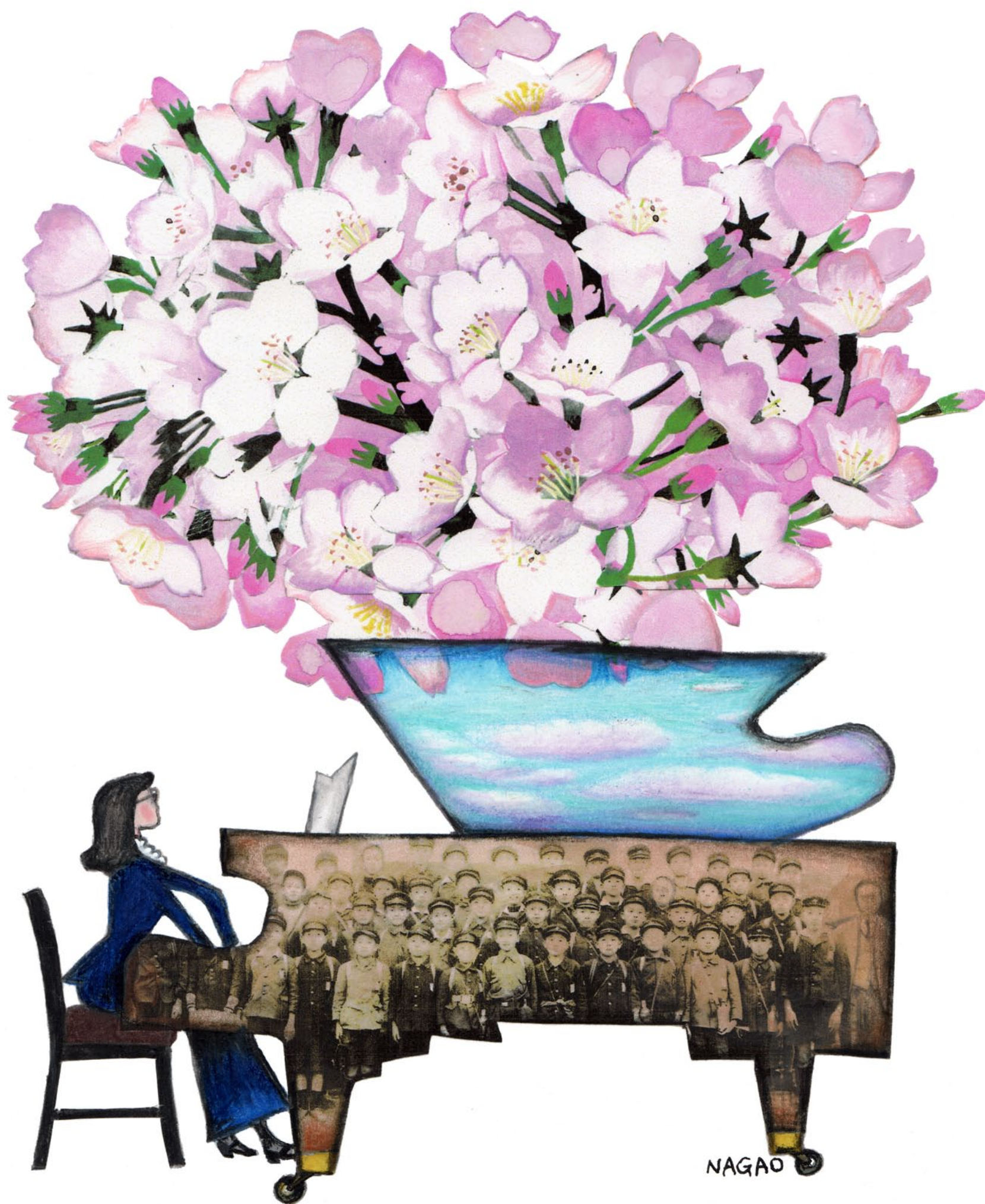
八十歳超え在ブラジルの旧友語る謝肉祭今昔
彼からのカーニバルDVDは毎年豪華に進化
半世紀前初体験のカーニバルが素朴に思える

奴隷貧者の祭りが地上最大超弩級に発展
数人が数百人の連に増大し競う大行列の波
どさくさ紛れ殺人も今年は十何人？ でケロリ
が、性器露出も絵の具塗ればOKの秩序あり

踊りもリズムも打楽器もほとんどアフリカ起源
黒人小母さんサンバ調子で旗振り連を先導
祭りの長も旗持ち小母さんには頭上がらない
豪華絢爛に変われど謝肉祭元祖への思いは不変

無い物は無い資源大国ブラジルは踊る……
大劇場の舞台並みに大仕掛けの山車が世界を往く！





♪ 仰げば尊し我が師の恩～

シクシク泣く女子生徒

♪ 扇げば涼しい団扇の風～

泣くもんか！ 瘦せ我慢の悪ガキ男子組

明治時代から続く別れの唱歌懐しい早春

小学三年で福島からブリキ屋に丁稚奉公のN

汽車で一緒に来た爺ちゃんに置き去りにされた……

机並べたNの卒業後はブリキ職人への途

東北から芸者屋奉公の綺麗な子は芸者への途

豊かな坊っちゃん刈りは私立贅沢校への出世途

ボクは画家への憧れなのに戦争始まっちゃって……

♪ 蛍の光窓の雪～

学校代表でヒトラー総統に絵を贈った思い出

戦争が終わったら画家になる！と希望が湧いた





♪昭和～昭和～昭和の子供よ僕たちはあ～～
子供たちは明るく歌って暗い新時代がスタート
世界大恐慌からの昭和育ちは八十歳超えた……

祖父は江戸の生まれ
父母は明治の生まれ
姉は大正～僕は昭和～孫たちは平成生まれさ

映画は音が出る、ラジオ放送は始まる昭和モダン
映画弁士楽士は失業し、紙芝居屋やチンドン屋へ
大学出ても就職難、ツルハシ振るう非雇い学士……
昭和モダンは明るく暗く賑やかに空しき新時代

オジイチャマは古い物も新しく直す名人ね
昭和育ちは器用貧乏なのさ
戦争に負けても強かったよ
ま、語り尽さない賑々しい雑多な人生なのさ





昼間の電車で赤ちゃん泣いた
 若いお母さん胸元開いて若い乳房を出した
 若い進駐軍兵士たちビックリ眼^{まなこ}で顔見合わせた
 敗戦直後の日本人、そのオドロキにオドロク

戦前の少年期に見た欧米映画は不思議だらけ
 映画の中の女優がキャ〜と胸隠す変な場面
 赤ん坊に乳与えるのも自然公然だった日本だ

古代ギリシャのクレタ女性は美しく胸元開き
 古代エジプトの着飾る王妃も胸は自然そのまま
 電車で赤ちゃん泣いてもオッパイ出さない日本人
 敗戦国から先進国への変身で授乳風景なくなった

初夏五月……

母の日だ！花屋へ駈ける子供たち

昨日までオッパイ飲んでたきかん坊ガキ大将





梅雨の鬱^{うっとう}陶しい日曜日

雨の日オヤジぶつくさ家の中

父の日チイチイ^{つばめ}燕の子

ガキのころ

家の中オヤジは年中オヤジの日

父の日なんてなかったなあ

食事どきオヤジが箸とるまで待つ子ら当たり前

ラジオ聞けてもオヤジ好みの落語講談^{なにわぶし}浪速節

へ父よ貴方は偉かったあ～の軍歌や戦勝報道

へ太郎は父の故郷へ～花子は母の故郷^{ふるさと}へ～

悲しく歌い子ら疎開……父頑張っても国敗れ……

戦い敗れデモクラシー 女性と靴下強くなる

父の日は母の日よりもつまらない





べろまっ赤、まっ黄、まっ青、かき氷
 縁日で小遣いはたく夏祭り
 贅沢な苺、レモン、メロンを模型で飾る屋台店

昭和ちょっと進んでアイスクャンデー現る！
 モダンにミルク、ストロベリー、カクテル……
 心棒の割り箸まで嘗めて涼しく大満足
 アイスクリームなんて別世界

小学校の夏休み、父の故郷四国へ遙か独り旅
 東京から鉄路と海路……三日がかりの心細さ
 田舎の道の炎天下、小さな店の張り紙に氷あり
 樽の中のもみ殻から氷取り出しビックリかき氷

下町の真夏の昼さがり氷屋のリヤカーが通る
 氷一貫目ちょうだい！氷冷蔵庫ある家からの声
 シャキシヤキシヤキ氷屋の^{のこぎり}鋸さばきが涼しい





NAGAO

真夏の太陽に川面キラキラ朝日から夕日まで
 忙しそうに若いポンポン蒸気船
 輝^{ふんどし} 一丁日焼け船頭の老いた荷船ゆったり……

隅田川を^{た だ}無料の渡し船で独り旅気分ガキのところ
 数分で着く佃島は^{ひな}鄙びた漁村の「遠い国」だった
 下駄磨り減り帰る船の向こうは銀座のネオン……

渡し船は橋になり、鄙びた漁村が都会になった
 走るボート、急がない屋形船……
 真夏のキラキラ朝から夜中まで隅田川

セーヌ川眺めるエッフェル塔
 隅田川眺めるスカイツリー
 ハドソン川眺めるエンパイアステート・ビル
 ずっと変わらない上り下りの速い船、^{のろ}鈍い船……
 都会の川は時代の流れ、人生の流れ、自分の流れ



対談：老人よ、“老働力”を発揮せよ

世のためにも、自分のためにも

長尾みのる（イラストレーター）＋岡村隆（月刊『望星』元編集長）



歳を重ねると失うものも多いけれども、得るものもまた多くあるのではないか。若さばかりがもてはやされるこの時代に、あえて反論を試みたい——そんな発想から、月刊『望星』の2011年11月号では「老化は“進化”である」という特集を企画した。そこで真っ先登場していただこうと編集部で考えたのが、『望星』の連載をはじめ、82歳のいまでも旺盛な創作活動が続けている、“元祖イラストレーター”の長尾みのるさんだ。8月27日、『望星』元編集長の岡村隆（現東海教育研究所 出版・電子媒体開発室長）が、東京杉並区の長尾邸におじゃまして、幼少時代の原体験から長尾流の处世術、人生訓まで、あちこち脱線しながらもいろいろな話をうかがった。本誌掲載時にページ数の関係で収録できなかったエピソードなども盛り込んで、ここにそれを再録したい。

岡村 社会が成熟し、長寿が当たり前になった時代になったいま、定年を迎えても社会生活から退くのではなく、それぞれの持ち場で頑張っていこうと、風向きが変わってきています。長尾先生はずっとフリーランスの立場で仕事をしてきたわけですが、定年退職ということでもなく、これまで自分の仕事に年齢的にひと区切りをつけようと思ったことはありませんか？ **長尾** 僕のような絵描きは定年なんて関係ないから、生涯現役です。だから、退職するのは死んだときだと、ずっと考えてきました。でも、70歳を越えたあたりでこれまでの仕事はがた減りに減ってしまい、これで俺もいよいよ老人の仲間入りかと、ちょっと悩んだことがあります。

す。それが、これまでまったく縁のなかったようなところから、新しい仕事の依頼が飛び込んでくるようになって、自分でも驚いています。

岡村 ここ数年も何冊か本を出されていますし、たしか去年（2010年）でしたか、お寺の襖絵を描かれましたね。

長尾 川崎市のあるお寺から依頼された仕事ですが、これまで襖になんか絵を描いたことはないし、安い墨を使いやがってとか、この筆遣いはなんだとか、偉い水墨画の先生から馬鹿にされるだろうから、とても受けられませんと一度は断わったんです。ところが若いお坊さんが、「そういう大先生に頼むのが嫌だから、こうしてお願いに来ているんです。いままでなかったような新しいやり方で、ぜひ描いてください」と言う。

そうなるにつちもくそ度胸が出てきちゃって、じゃあ目の前で描くからと、古新聞の上で素描練習したあと、深呼吸をして無為の境地で筆をとり、下絵なしに現場でぐいぐいと2時間ほどで仕上げてしまった。こうやって自分流にやりたい放題やらせてもらったおかげで、僕らしい作品になったと思います。

思い起こしてみると、若い頃からずっと、僕の人生ってそういう「捨てる神あれば拾う神あり」の繰り返しでしたね。

●子どもの頃から絵を描くのが好きだった

岡村 先生がそもそも絵の道を志したのは、いつ頃からなんですか？

長尾 僕は東京の下町、いまの京橋の生まれで、父親はそこで小さな工場を持って、豪華本などの装幀を手がける製本業を営んでいました。末っ子で、4歳のときに母親を亡くしたこともあって、一人でよく絵を描くようになったみたいです。紙の上だけでなく、蠟石を見つけたら道路に描いてみたり、自然と絵を描くことが身についていったんですね。

そのうちに学校でも絵の力を認められ、代表としてヒトラーに贈





る絵を描くことになったんですが、僕の好んで描いた、家族でごちそうを食べている団欒の絵なんかじゃなくて、軍艦とか、日本軍の戦闘機が爆撃をしているところを描けという。機械を描くのなんて、いちばん嫌いなことなのに。

岡村 でも、中学を卒業したら陸軍の学校に入学してしまうんですね（笑）。

長尾 戦争末期でいつも腹が減っていたから、ちゃんと飯が食べられるということに惹かれて、特別幹部候補生になったんです（笑）。特殊情報通信班というところで通信の訓練を受けましたが、そのまま敗戦。しばらく横浜電信局でトンツートンツーと米兵の電報なんかを打ったりしていましたが、いやいやながらやっているんで僕は間違いが特别多く、職場ではあんまり歓迎されていなかったようです（笑）。

戦争が終わってみると、俺はもう絵描きになるしかない、絵しか描けないんだという思いがつのってきて、仕事を辞めて早稲田大学にできた工芸美術研究所に入学しました。所長は「考現学」を提唱したことで知られる今和次郎先生で、考現学をはじめ、染色とか陶芸、工芸、建築史など講義を受けましたが、とくに気に入ったのは服飾史で、1回も休まずに講義に出たほどです。

ところが、そこへ講義に来た舞台美術家の話を聞いて、舞台

は華やかでいいなとすっかり魅了されてしまい、その吉田謙吉という先生の弟子となりました。

岡村 絵描きではなく、舞台美術家になろうとしたわけですね。

長尾 ええ。でも、戦後すぐのことだから、帝国劇場や邦楽座などの名だたる大劇場はまだ進駐軍に接収されている。共立講堂や日比谷公会堂も大御所たちがしっかり押さえていて、学校を出たばかりの若造が仕事をする余地なんて、どこにもない。こんな閉塞的な状況なら、もう外国に飛び出すしかないだろうと、1953年に貨客船でブラジルに渡ったんです。

●アートディレクターからイラストレーターへ

岡村 ブラジルでしばらく過ごしたあとでヨーロッパに渡り、結局4年がかりで地球を一周して、56年に日本に戻ってきます。

長尾 その頃には進駐軍の文化占領ももう終わっていて、日本に残っていた学友たちは舞台や映画の仕事に就いていた。困ったな、俺は地球をぐるりと回ってきただけじゃないかと落ち込んでいたら、その世界一周体験を取材させてくれという話がきて、テレビに出たり、週刊誌のトップ記事になったりもしました。

そのうちに、広く世界を見てきたんだからこんな仕事もできようという話が持ち込まれて、アートディレクターとして活躍するようになります。料理やファッションなどをカメラマンに撮らせて、雑誌のグラビアページやカタログ、広告なんかを作っていくという、日本ではまだ珍しかった、新しい分野の仕事です。おかげでけっこう繁盛して、帰国して数ヵ月もしないうちに、ルノーの中古を買いました。

ところが、そうやってアートディレクターという仕事が世間に知られるようになると、大手の広告代理店が優秀な奴をかき集めて、立派な作品を大々的に売り込んでくる。センスだけが頼りの仕事ですし、カメラマンと組んでやる共同作業なので、いまは繁盛していても、きっとすぐに大きな壁にぶち当たるに違いない。

※ブラジルでのエピソードなどは、『ハッピーエンドレス』Vol.1の巻末に掲載した「評伝 先駆者としての長尾みのる」（岡村隆）で詳しく紹介している。

そんな思いをいただいているうちに、芥川賞をとったばかりの菊村到さんから、連載小説の挿し絵を描いてくれという依頼がきたんです。広告の仕事だとどこにも名前が出ませんが、挿し絵画家だとどんなに下手な絵でも、作家と並んででかでかと名前が載る。大先生がごろごろしている挿し絵の世界で一人前としてやっていくために、アートディレクター稼業はそっちのけで、必死で新しい表現を考えました。

岡村 こうしてお聞きしていると、自分から新しく仕事を求めたのではなく、向こうから次々と舞い込んでくるような感じですね？

長尾 そうなんです。で、そのうちに雑誌の時代が到来して、創刊ラッシュが続きます。新しい雑誌にふさわしい新しい画家を起用したいと、大先生たちではなくて僕に仕事がかかる。やれ週刊誌だ、それ月刊誌だとどんどんこなしていったおかげですっかり売れっ子になってしまい、小説家から次々と指名が舞い込むようになりました。

そんなときにいきなり、まだ有名でなかった永六輔さんから電話があって、「今度『アサヒグラフ』で新しいスタイルの小説を連載するから、絵を描いてほしい」というんです。さっそく朝日の編集担当者に会いに行ってみると、「うちは小説も挿し絵もしかるべき大先生にしかお願いしないのに、勢いで新人の永六輔に書かせる約束をしたら、どこの馬の骨ともわからないお前のような奴を推薦してきたので、正直困っているんだ」などと頭をかいている。

岡村 いかにも当時の大新聞社の雰囲気やを彷彿とさせるようなエピソードです（笑）。

長尾 そこで、「じゃ、文壇や画壇の大先生たちから文句が出ないように、ストーリー・永六輔、イラストレーション・長尾みのると、カタカナにしちゃったらどうですか？」と提案した。そもそもイラストレーションとは図を使った説明のことだから、芸術としての絵画とは違うものだ。すると、「それは面白い、いい考えだ。イラストレーションっていうのは長いから、イラストと略そう」という



ことになって、連載が始まったんです。

それで、あっという間に人気が出て、イラストやイラストレーターという言葉が世の中に広まった。すると今度は、これまでグラフィックデザイナーと名乗っていた絵の達者な連中が、大手広告代理店の意向を受けて、イラストレーターとして続々と出てきます。

こんなふうに、僕のほうが先に出発したのに、必ずすぐ後からもっと優秀な奴がどっと追いかけてくるので、また別の道を進むことを余儀なくされる。そんな生き方をしているうちに、いつのまにか80を越えて、82歳になっちゃいましたけど（笑）。

●気が小さいことを武器にする



岡村 これまでずっと、先生は組織に所属することなく、一人でフリーランスとしてやってこられたわけですが、会社などに入ろうとは思わなかったのですか？

長尾 子どもの頃の僕は病弱で、友だちがチャンバラごっこや戦争ごっこに夢中になっているときも、姉とお人形さんごっこをして遊んでいるような少年でした。あの時代だから、体が弱いということに、毎日大きな引け目を感じていましたね。下町じゃ、みんなが競い合ってトンボ取りをするんですが、そういう団体行動に参加するのが苦手で、野球とか、メンコなんかもやりませんでした。絵を描くのが好きになったのも、一人だけでできるからなんです。

どんな世界でも、人が集まるとやがてなんとか協会とか、なににクラブなんていうのを作りたがりますが、組織というものはしばらく時がたつうちに親分子分の関係が強くなってきたりして、どんどん権威主義になっていく。変なところで足を引っ張られるのも

嫌だし、なによりも組織が古くなると、そこに所属する人間も古くなって澱んでくるのがたまらなく嫌だ。

だから僕は、内側に引っ張り込まれそうになると、パッと船を乗り換える。乗り換えの名人なんですよ（笑）。組織の親分の推薦がもらえないから、僕はいつまでたっても勲章なんてもらえないけれども（笑）、それでいい。妙なところで自信があるから、時をうかがって、自分を発揮できるチャンスがやってくるのをじっと待っているようなところがあります。**岡村** その自信というのは、どこから湧いてくるのですか？

長尾 気が小さいということですね。気が小さいのを武器にしているのかもしれませんが。失敗が怖くてくよくよ悩み、細かいところに目が届くから、致命的な大失敗はしない。だから長く続けられて、結果的に意外と大きな仕事ができる。比べるのも変ですけど、ナポレオンも信長もヒトラーも小心者だったのに、やがて大物になっています（笑）。

小さいときに母親を亡くしたあと、親父は仕事ばかりでしたから、身近で親しくしているのは女中たちでした。彼女らはせいぜい2～3年もいれば交代していくので、親に甘えるような接し方はできないのに、友だちみたいにすぐ仲良くなってしまう。そんな女中受けのよさに上の兄貴が焼き餅を焼いて、お前はなんだ、べたべたするなと僕を蹴飛ばしたことがありました。そういう保身術が、子どもの頃から自然と身についていたんでしょう。

軍の学校にいたときも、僕は最後まで一度もぶん殴られませんでした。おっかない上官に出くわして敬礼をする前に、一瞬ニコッと笑顔を見せていたからなんです。あいつはかわいいところがあるなと思っていると、ぶん殴れない。他のみんなからは、僕のニコッがぜんぜん見えていない。

岡村 そんなお話を聞いていると、なんとなく先生が撒き餌をまいたりして、いろいろと仕掛けをしているようにも感じられますね（笑）。

長尾 まあ、仕掛けをしているんでしょうね（笑）。以前ある本で読んだのですが、蜘蛛には巣を張って獲物がかかるのをじっと待つタイプと、外に出て行って投網のように獲物に向かって網を投げかけて捕るタイプと2種類いるそうです。外に出たほうがいろいろな現象も見えるから、若い頃の僕は当然、投網のタイプでした。ところが歳を取って体力がなくなっからは、蜘蛛の巣を張って待つタイプになった。すると、それを嗅ぎつけてやってくる若いのがけっこういる。



先日も、イラストを描いているという20代の女の子がやってきて、僕の感覚に触発されて作ったという小冊子を見せてくれましたが、発想はものすごく面白いんだけど、絵のほうは少し行き詰まっているように感じられる。そこで、世の中にイラストレーターは掃いて捨てるほどいるし、君は文章もこれだけ書けるのだから、イラスト+ストーリーで、その昔に僕が使っていた「イラストリー」という看板を掲げてやってみたらどうか、などとアドバイスしてやると、喜んで帰って行きました。

●在庫整理と横丁探しを

岡村 先生は以前から、“老働力”という言葉が提唱されて、シニア世代の力を社会がもっと活かさなければならないと言っていますね。

長尾 企業などの組織のなかにも、長く人生を歩んできた人はそれなりの「在庫」を持っているはずだと思うんです。知識や技術、経験、人を見る目などは、そのまま職場の外でも活かすことができるでしょう。体力や気力が昔ほどなくなっても、若い

連中は力を持て余したり、行き詰まったりしているわけですから、あまり気にしなくてもいい。周囲の人間を、自分流に活用してしまえばいい。

だから、人生の後半になったらまず勧めたいのは、自分がどんな在庫を持っているのか、何が役立ちそうなのかを整理してみることです。どの引き出しに何が入っているのかもことごとく明らかにして、必要があればいつでも取り出せるようにしておく。

岡村 つまり、どんな立場の人でも、なにか価値のあるモノを持っているはずだと。在庫というのは具体的に言うと、経験、知識、技術といったものですね。それをどう活用できるか、まず在庫の調査から始めなきゃいかんと。

長尾 そう。体力以外の。そのうえで、どこで在庫がはけそうなのかを考えてみるんです。たぶん、それは表通りにある店ではない。ところがちょっと横丁に入ってみると、面白がってくれる連中がいます。横丁界限というのは、まあ昔のアングラミたいなところですよ。いまはこれまで表に出てこなかったゲイやオカマがもてはやされる時代ですから、横丁では僕なんかが、彼らの目にはかえってフレッシュに映るらしい。いまは小さな横丁でも、いつの間にかそこがメインストリートになっていくかもしれない。どんな人でも、自分に向く横丁というのは必ず見つかるはずです。

ただし、横丁に入っていくときには、自分が所属していた組織



の権威や価値観を振りかざしたりしないよう、気をつけたほうがいいですね。僕が外でしゃべる機会があるとよく顔を出してくれる若い編集者がいるんですが、大手出版社に勤めているのに、会社じゃ何言ったって通じませんからねなどとすごく醒めていて、権威に対して反発したい気持ちを秘めている。

もうひとつ気をつけたいのは、横丁の組織に深入りしないことです。さっきも言ったように、どんな組織も長くやっていると必ず澱んで、古くなってくる。そのまま古い組織と一緒に沈殿してしまっ
てはつまらないので、俺もちょっと飽きられたかなと感じたら、自分のキャリアとしてつながらなくても、さっさと船を乗り換えてしまえばいい。

●“老働力”を社会に活かす時代に

岡村 今日のお話をうかがっていると、歳をとってからでも、何かそれを育てたら自分の軸になるような、自信につながっていくようなものを見つけ出すことが先決だよという気がしてきました。

長尾 在庫をちゃんと見ていけば、自分の売り物というのは必ずあるんです。もともと日本の文化って、歳を取ってからますます冴えるものが多かったでしょう。能や狂言も、義太夫や浪花節だって、歳をとればとるほど枯れて、重みを増してくる。歌舞伎役者なんかも、トンボを切るのなんか下っ端にやらせておいて、自分は腰掛けてでーんと構えていればいい。ところが欧米的な価値観だと、歳をとっていい声が出なくなったら、もうだめ。お囃子で鼓をポンポン打っている連中なんかでも、歳を取った渋い人ほど偉いんだけど、西洋音楽のドラマーなんかは体力が落ちたら使ってもらえません（笑）。

岡村 日本文化は、もともと老成文化なんですよ。

長尾 ところが日本のメディア、とくにテレビ局は、ついこのあいだまで若い人ばかり追いかけてきた。若ければ出演料も安いし、視聴率もとれる。それがいま、みんながテレビを観なくなって行き詰まっている。だから、いまこそ老人の出番なのではないかと思えますね。日本の社会全体で考えれば、在庫を豊富にかかえた老人の力を活かさない手はない。

知人で文化人相手の通訳を長く務めてきた人がいるんです

が、通訳の世界もベテランより若手を起用することが多くなったと嘆いていました。年寄りには表現が古いと言われるが、若い人は語彙が乏しいから、話し手の「かわいい」をそのままkawaiiと訳してしまう。政治家が「やっ、どうも、どうも!」と手を挙げたとき、今日は楽しかったよだったり、ごちそうさまだったり、微妙なニュアンスが込められているのに、それを的確に意識できない。

いま、映画やテレビドラマの時代考証なんかも、まったくいい加減でしょう。

岡村 時代劇でも時代考証をほとんどやらなくなったようですからね。言葉遣いもひどい。町人に侍言葉をしゃべらせたり。

長尾 まあ江戸時代なら仕方がないけれども、実際に当時を生きた人がまだいるんだから、昭和を描くものは考証をしっかりとってもらいたい。戦争中の衣服は継ぎはぎだらけでボロボロだったはずなのに、あんなにきれいな服にしちゃったら嘘くさくなってしまふとか、終戦直後に流行ったのはリンゴの歌だけじゃないとか、言いたいことはいっぱいあります。

ただ、それを言いに前にしゃしゃり出してしまうのは、時代が受け入れてくれない。いま多くの人々の心に届くのは、いかにあの戦争がいかに悲惨だったかというような、型にはまった話ばかりなんですから。俺が俺がと自分の意見を無理に押し通そうとしたら、教えてやろうという偉そうな態度をとったりすると、とたんに嫌がられて、抵抗されてしまう。逆に、もっと他にありませんかと、向こうから言ってくるのをじっと待つくらいがいいんです（笑）。

●ハッピーはエンドレスで

岡村 この「ハッピーエンドレス」という連載、2003年に最初に始めるときに、自分にとっては死ぬときが定年退職だから、なんとか自分にとって居心地のいい場をつくりたい。流されもせず、無理に泳ごうとせずに。そういう期待を込めてこのタイトルを付け

たように記憶していますが、当時からそういう思いが明瞭に頭にあったんですか？

長尾 本当にハッピーな奴なんかいない。ハッピーな状態なんか永く続かないと、常々僕は思ってきました。僕の人生なんか、アンハッピーの連続ですよ。でも、少年時代にいやいや学校で軍艦や戦闘機を描かされた僕としては、怖い話や恐ろしい話なんて、絶対に絵に描きたくない。あくまでもハッピーな話で行きたいんです。ハッピーエンドという言葉がありますが、エンドにして終わっちゃうんじゃないくて、そのままずっと、どこまでもエンドレスで続けたい。

じつは、この連載が始まった頃は、これはとても続かないな、すぐに材料が尽きてしまうぞと思っていたんです。エンドレスというのは、願望でもあったわけですね。

ところが80を過ぎてみると、80年分の在庫が脳の奥底にあるんだということに気づいた。昭和という時代が全部、僕のなかにある。

僕ぐらいの年齢の人はみんな昭和を丸ごと生きてきましたが、そういう昭和人パワーをいまの若い人たちが懐かしい、懐かしいと言って面白がってくれる。僕らが明治の世をどこか懐かしく思うように、彼らも自分が体験していない昭和を懐かしい時代としてイメージしているらしい。だから今後も死ぬまで、昭和の在庫のなかからなんとか絵の材料をひねり出していけるんじゃないか。老人になったことを怖がっていたら、きりが無い。年相応であることを表現の材料にしまおうと思っています。

岡村 なるほど、「ハッピーエンドレス」には、そういう背景があったのですね。今日は今後の生き方の指針となるような、元気の出るお話をいろいろかがえたように思います。今後のご活躍を期待しています。[構成：丸山純]



長尾みのる・主な著作

- 1959 画集・NAGAO（自費出版）
- 1960 図説・西欧服飾誌（文画堂）
- 1961 絵の中の放浪（南北社）
- 1964 イラストレーション（双文社）
- 1965 目立つデザイン（南北社）
- 1966 ソンブレロは風まかせ（朝日新聞社）
- 1966 お嬢さんチャッカリ旅行（三一書房）
- 1966 冒険の珍説（コダマプレス）
- 1967 現代スタンドプレイ作戦（文理書院）
- 1967 画集・ALAS！（文理書院）
- 1968 愛の画集（三一書房）
- 1969 革命屋（東京文芸社）
- 1970 バサラ人間（駿河台書房）
- 1971 ヒトの目をひく法（文化出版局）
- 1971 マスコミ・イラスト入門（実業之日本社）
- 1973 地球のうら側へ行ったぼく（講談社）
- 1973 地球のうらで孤独になろう（番町書房）
- 1975 わ・すぴりっと（いんなあととりっぷ社）
- 1976 文芸の絵本（朋友出版社）
- 1976 マスコミのイラストレーション（美術出版社）
- 1980 視覚のいたずら（ダイヤモンド社）
- 1981 自魂他才でグッドモーニング珈琲（冬樹社）
- 1981 窓の向こうはホワイト・アングル（PHP 研究所）
- 1982 心がひとり歩きする（講談社）
- 1985 にぎやかな視点—昭和おじさんの絵ッセイ（中央公論社）
- 1985 明日もパフォーマンスチックに（毎日新聞社）
- 1989 イメージの時間（河出書房新社）
- 1995 タイムレス・クルーズ（読売新聞社）
- 1999 視覚のいたずら〔補足改訂版〕（小学館）
- 2005 バサラ人間—イラストーリー（よるひるプロ）
- 2006 革命屋—女と革命と欲望（よるひるプロ）
- 2007 絵で読む『老子』無為を生きる（小学館）
- 2011 長尾みのるの人間イラストーリー（アート・アートダイジェスト）

長尾みのる・略歴

- 1929年 東京・京橋に生まれ育つ
- 1950年 早稲田大学「旧」工芸美術研究所・卒
服飾学校の（西洋服装史）講師などをしながら、舞台美術家への修行を続けた。
- 1953年 至難の海外渡航許可を得たが、外貨持ち出し禁止のため一文無しで日本脱出。敗戦後初の3年余をかけた海路・陸路の無銭旅行世界一周になる。
- 1957年 完成したての国産カラー印画紙で、日本初の“カラーフォト・デザイン展”をやリ、初のアートディレクターになった。その頃、放送作家・永六輔とコンビでのアサヒグラフ連載作品が新語“イラスト”を流行させ、初のイラストレーターとなり、以来その仕事を続けている。
- 1976年 講談社・出版文化賞

望星eブックス

ハッピーエンドレス—心の残像月替わり雑画集 Vol.2

著者：長尾みのる

発行日：2011年12月20日

発行者 街道憲久

発行所 株式会社東海教育研究所
東京都新宿区西新宿7-4-3

© Minoru NAGAO

※本作品の一部または全部を無断で複写・転載することは禁止されています。
